



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 30, 2016, No. 40

【役員名簿(2016年6月現在)】(五十音順)

代表：管 啓次郎 (明治大学)
副代表：結城 正美 (金沢大学)
顧問：上遠 恵子 (レイチェル・カーソン日本協会)
西村 頼男 (阪南大学名誉教授)
事務局長：高橋 綾子 (長岡技術科学大学)
事務局補佐：
辻 和彦 (近畿大学)
浜本 隆三 (福井県立大学)
会計：相原 優子 (武蔵野美術大学)
大野 美砂 (東京海洋大学)
監事：上岡 克己 (高知大学名誉教授)
ニューズレター編集委員：
浅井 千晶 (千里金蘭大学)
豊里 真弓 (札幌大学)
巴山 岳人 (和歌山大学・非)
会誌編集委員：
黒崎 真由美 (関東学院大学)
塩塚 秀一郎 (京都大学)
芳賀 浩一 (城西国際大学)
波戸岡 景太 (明治大学)
John Rippey (滋賀県立大学)
コンピューターセンター：
岩政 伸治 (白百合女子大学)
北国 伸隆 (明治大学・院)
山城 新 (琉球大学)
評議員：Bruce Allen (清泉女子大学)
池田 志郎 (熊本大学)
石幡 直樹 (東北大学)
太田 雅孝 (大東文化大学)
小谷 一明 (新潟県立大学)
茅野 佳子 (日本大学・非)
塩田 弘 (広島修道大学)
高橋 龍夫 (専修大学)
高橋 勤 (九州大学)
高橋 昌子
巽 孝之 (慶応義塾大学)
中川 僚子 (聖心女子大学)
林 直生 (滋賀大学)
平塚 博子 (日本大学)
村上 清敏 (金沢大学名誉教授)
横田 由理 (大東文化大学・非)
吉田 美津 (松山大学)
院生代表：戸谷 洋志 (大阪大学・院)
広報：喜納 育江 (琉球大学)
河野 千絵 (日本大学・非)
松永 京子 (神戸市外国語大学)
研究助成：岡島 成行 (青森山田学園)
乳井 昌史 (早稲田大学)
野田 研一 (立教大学名誉教授)
山里 勝己 (名桜大学)
管 啓次郎 (代表)
結城 正美 (副代表)

みやこからみずうみへ

代表 管 啓次郎 (明治大学)

みやこからみずうみへと、歩いてきました。つまり、京都から琵琶湖まで。比叡山に登ると、そこからは琵琶湖の広大な湖面が見わたせると聞いて以来、一度は果たしたい旅だと思っていた。山頂に達して、そこから湖の水に実際に手をふれるまで歩いてゆく。そうすれば、そもそも京がなぜあのロケーションで都になったのかも、近代交通機関が整備されるまでの過去千数百年の人々の交通の実体も、おぼろげにであれ、把握できるのではないかと考えたからだ。

登りはじめたのは叡山電鉄の「修学院前」駅から。快晴の五月の土曜日。今回は都市史・建築史研究者である松田法子さん(京都府立大学)の研究室との合同ゼミ合宿で、松田ゼミから5名、明治大学のぼくのゼミから6名が参加しての、混成的な道中となった。経路のプランはすべてタフなフィールドワーカーの松田さんにおまかせ。広い修学院離宮の脇を通って、雲母(きらら)坂と呼ばれるあたりから山道に入る。普通の運動靴で来たが、道はまもなく本格的な山道になり、岩に穿たれた狭い一本道がつづく。勾配もかなりあり、けっして簡単な道ではない。岩を削って通れるようにしている部分は、縦一列に進むしかなく、どんな軍勢が来てもこれなら少人数で迎え撃つことができただろう。小休止をはさみつつ、ケーブルの駅まで二時間あまりをかけて登った。

大比叡山頂はそこからさらに少し登ったところであって、標高は848.3メートル。爽快。でも三角点は木立に囲まれ、思っていたような見晴らしは得られない。そこから比叡山延暦寺のいくつかの建築を横目で見ながら下りはじめる。するとその途中、一瞬ではあるが木々の枝のあいまからたしかに湖面が見えて、その広大さは海と変わらなかった。この下りの道も意外なほど狭く、かつ険しい。乾いていても滑る斜面で、気をつけて歩かなくてはならない。雨が降ったら確実に小川のようになってしまうだろう。これが延暦寺への歴史的な表参道?一度お寺に参るだけの一般人はともかく、建築に携わったり、寺を維持したりする人たちはどれだけ苦労したことか。下まで降りきるとそこは門前町・坂本だった。穴太(あのう)積みと呼ばれる、大小の石をうまく積んだ独特な石垣が興味深い。ここ

まで来れば湖面はすぐそこで、最後は雄琴温泉の宿の送迎車に乗せてもらったけれど、ぶじ湖畔にたどりつくことができた。これで歩行の一日は終了。

琵琶湖文化圏を実感したのは翌日だった。朝、浜大津にむかい、車を借りる。しばらく走り、堀切港から沖島にわたる。日本の湖の島で唯一、人が住むところで、船着場の先から集落がひろがり、高台の神社に上るとその全貌が容易にわかる。集落はいかにも漁村、狭い道。家々の軒先に洗濯機が置かれ、外から戻るとそのまま汚れた衣服を洗えるようになっている。島のおばさんたちが作ってくれたうどんには鮎の稚魚の佃煮がついてきた。琵琶湖では鮎は大きくならないのだという。でも稚魚が各地に出荷され放流されると、大きな成魚へと育つ。ここではまた鰻は「むなぎ」と呼ばれ、それは「胸黄」で、天然鰻の胸の色に由来する呼び名であり「うなぎ」の語源だそうだ。島から本土(?)に戻り、安土城跡にむかった。歴史博物館も信長の館も興味深かったが、いちばんのポイントは地形。いまでは陸地になっている部分や「西の湖」として水面が残っている部分を含めて、城からは琵琶湖にいたるまで一面の湿原だったのではないかと思う。戦略的には、それが城を守った。また湿原に開かれた水路が、一定の交通と輸送を確保した。傾きはじめて夕陽の中で風景を眺めながら、往古のからんと開いた広大さを想像するのも楽しい。

湖の東岸をずっと北上し、余呉湖や半島をまわりこんで、その晩は菅浦という古い集落のそばに泊まった。きれいでしずかな国民宿舎で、奥琵琶湖のおちついた湖面が満月に照らされている。美しい土地だ。この季節、夜明けが早く、朝の五時にはほくは散歩に出ていた。須賀神社という古い、かなり大きな神社が、集落を守っている。ここは裸足で参詣する決まりになっているらしく、境内まで行き靴を脱いで歩くと、ひんやりした石や砂利が気持ちいい。いまでこそ枯れた漁村でしかない菅浦だが、むかし、千年以上前には、南の大津と並ぶ琵琶湖の主要な港だったそうだ。それで話がつながってくる。朝鮮半島からわたってきた人々は、日本海の入り組んだ湾のいずれかに上陸し、南への通路を求めて陸路をたどるうちにほどなくこの大きな湖に出会い、交通路としての琵琶湖のポテンシャルによるこんだことだろう。海に比べればはるかに楽な航海で、南岸まで行ける。もちろん、比叡山は峻厳だが、その山並みさえ越えればまた大きな盆地がひろがっている。そこからは大阪湾もすぐそこ。水上交通の観点から見ると、本州島のこの地域は、驚くべき可能性に恵まれていたわけだ。千年前に戻って、日本海から琵琶湖を経て瀬戸内海に抜けるルートに行くことができ



たなら！どれほどきびしくても、大きく報われる旅になったにちがいない。

その午後はまた近江八幡市に戻り、水郷とされる円山地区で舟に乗った。一面の葦の原に水路が拓かれて、立って櫓を漕ぐ老いた船頭さんひとりの舟で、のんびりと案内してくれる。アシと呼ぶべきかヨシと呼ぶべきか、葦と書くべきか蘆と書くべきか、いずれにせよ全世界の湿地帯にもっともよく見られるこの植物を、ここではいまでも毎年の火入れにより育て（春先に焼いておかないと他の草が茂ってしまう）、葎簀や屋根や和楽器（笙、ひちりき）の材料として出荷しているのだ。やかましくさえざる小鳥はヨシキリ、水面に浮かぶかわいい小鳥はカイツブリ。亀もイタチもいて、泥水の中にはすっぽんやうなぎも住んでいることだろう。この水路はすぐそこが西の湖で、たどってゆくならいまでも安土城のすぐ下から琵琶湖まで、舟で行けるのだという。なんというおもしろさ。水郷とはつまり湿原に生活しているということで、オランダにもかつては葦を刈り舟で出荷する人々がいた。その葦は屋根葎きに使われ、また葦を敷き泥を重ねることをくりかえして土手が作られたことを思えば、オランダの国土造成の要である干拓事業は、そんなふうにも鳥の巣作りを思わせる作業によって進められたわけだ。これで昨年の夏に訪れたオランダの風景と、琵琶湖地域がはっきりとつながった。

これだけの山地から流れ出すおびただしい河川をもつ日本列島の平野部は、湿原を原風景とするといっているのではないかと思う。京都の市街地で歩きはじめ湖にむかった旅が、またその事実を思わせてくれた。湿原が、全面的に水田に転化されていったのが、われわれの島の歴史。それでこうして琵琶湖を訪ねることができたぼくには、ひそかに次の目的地と考えているところがある。八郎潟だ。ある意味、日本近代が行き着いた場所。いつかその報告をします。

【開催のお知らせ】

2016年度ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会(2016年8月20日 [土] ~21日 [日] @AOSSA 福井市地域交流プラザ 6F
[福井県福井市])

浜本 隆三 (福井県立大学)

本年度の大会は、個人発表5件、シンポジウム2件、フォーラム1件、院生企画のクロスレビューと基調講演、さらに2日目にはフィールド・トリップも企画、盛りだくさんの内容となっております。詳細につきましては同封の資料をご参照ください。



高速増殖炉「もんじゅ」(撮影：浜本隆三)

さて、実行委員としてぜひみなさまにお知らせしたいのは、本年度の基調講演についてです。今年は、福井県と滋賀県で原発差し止め訴訟を闘っておられます、お二人の弁護士にご講演を依頼しております。

福井県からは、「大飯原発差し止め訴訟福井弁護団」の笠原一浩弁護士がご講演下さいます。笠原弁護士は、福井県の原発訴訟団の立ち上げ時から中心的なメンバーとしてご活躍されて、現在は事務局長として原発訴訟の最前線で闘われておられます。

司法を通じて原発を止める！

2014年5月21日、福井地方裁判所が「大飯発電所3・4号機の原子炉を運転してはならない」という原発を止める画期的な勝訴判決を下したことは、みなさまの記憶にも新しいと思います。ただ、この決定は、2015年12月24日に、同じ福井地裁によって覆られ、仮処分の却下が決定されております。これを受け、弁護団は2016年1月6日に名古屋高等裁判所金沢支部へ決定を不服として抗告を行いました。

福井地裁で、大津地裁でも！

ところが、この抗告は3月11日に取り下げられます。3月9日、福井のお隣り、滋賀県の大津地裁において、高浜原発3・4号機の運転を禁止する仮処分が決定されたのです。この裁判は、滋賀県で原発訴訟を行う「福井原発訴訟(滋賀)弁護団」によって勝ち取られました。

賠償請求額は1000億円！

しかし、3月18日、衝撃的なニュースが報道されます。関西電力の八木社長が、仮処分の決定が覆った場合、申立人に損害賠償を請求する、と発言したのです。高浜原発の3・4号機が止まった場合、損害は1日3億円、1年だと賠償請求額は1000億円になります。このような賠償額を、滋賀県内のわずか29人の申立人に請求するという常軌を逸した発言が、原発訴訟の委縮を狙ったものであることは明白です。すなわち関電の八木社長は、司法を通して原発の安全性は立証できない、と公言したも同然なのです。

原発訴訟の最前線を熱弁！

この報道を受けて、私は急ぎょ、滋賀弁護団の事務所へ打診し、同弁護団において活躍する若手ホープの高橋陽一弁護士より、ご講演のご快諾を頂きました。

いったい原発訴訟の現場では、いま何が起きているのか。福井と滋賀で原発差し止めを勝ち取った両弁護団が、揃ってご登壇下さるのは日本で初めてのことで！原発訴訟の最前線からの熱弁、どうぞご期待ください！



中池見湿地と里山の風景(撮影：浜本隆三)

高速増殖炉「もんじゅ」に迫る！

ご講演を拝聴したあとは、フィールド・トリップを企画しております。今回は時間の都合で、大飯・高浜原発までは足を延ばせませんが、美浜原発と高速増殖炉「もんじゅ」には迫る予定です。途中、福井で初めてラムサール条約に指定された中池見湿地にも立ち寄り、すこしばかりですが、里山の風情と福井の自然を感じて頂ければと考えております。

【イベント報告・お知らせ】

「環境カフェ」—社会コミュニケーションの実践

多田 満 (国立環境研究所)

東日本大震災と福島第一原発事故(2011年)を契機に、声明「科学者の行動規範」(2013年、日本学術会議)の改定により、専門家(研究者)は「市民との対話と交流に積極的に参加する」こと、さらに専門家には「社会に向き合う」ことがもとめられています(社会対話)。よって研究者は、専門分野の学術に貢献する一方で、社会対話による市民社会への貢献がもとめられているといえます。それはまた、社会対話のなかで、専門(科学や文学)知と市民の生活知やローカルナレッジ(現場知)は交流し、社会全体がもつ知性にかえ、新たな価値を作り上げていくことにつながります。現場知については、地域に長年暮らし、自然環境とも親しみ、そこでの動植物の生態に詳しい自然愛好家たちの知識や、川や海の生態系のことなら漁業者の知識が重要な役割を果たすことが多いのです。

ところで、環境研究は「自然と社会と生命のかかわりの理解に基づいた」研究とされます。持続可能な社会を目指すためには、生命を基点に生命(人)—自然—社会(経済)のつながりのなかで、経済的価値(経済至上主義)から「生活の価値」(生命をよく活かす)を最優先に考える価値の転換がもとめられます。そのための市民の理解と共感をえるには、専門家は社会対話の過程において、人文的教養や生活感覚が必要とされます。ゆえに、専門家は科学性だけでなく、人間・社会性を通して市民の理解と共感をえるものと考えられます。ここでは、社会コミュニケーションの実践として筆者のおこなっている「環境カフェ」について紹介します。なお、「環境」は自然だけでなく、人びとの社会や文化(芸術)をその環境にふくみます。

「環境カフェ」の開催の目的や目標、開催方法は下記の通りです。また、表1のように開催の主体は、「専門家(研究者)」「大学、研究所、学会、NPO」「学生(サークル)」の3つのタイプに分かれます。2015年5月2日、拠点とする日比谷公園(日比谷グリーンサロン)の第1回からこれまでに東京はじめ全国で24回、Rカーソン『センス・オブ・ワンダー』などの文学をはじめさまざまなテーマ(表2B)に沿ってそれぞれ2~8名の市民の参加により開催しました。なお、所内に社会対話・協働推進オフィスが開設されたことから、タイプ2(表1)での開催、ならびに学生主体のタイプ3での開催に向けた協力や支援を継続していきます。

●開催の目的

「環境カフェ」は、専門や職業の枠を超えた市民(高校生や学生もふくむ)の交流(理解と共感)による社会コミュニケーション(社会対話)です。生命(人)と自然、社会(経済)のかかわりの理解から「人間であること」「いかに生きるか」をともに考えます。それにより「自己実現」の一助となることを目指しています。

●開催の目標(2つの意義)

【対話と協働】市民の対話を通じてともに「学ぶ」「考える」ための実践(協働)の場です。ある話題(テーマ)について参加者が対等な立場でみずからの経験(感じたこと、知ったこと、考えたこと)を語ります。

【経験の向上】参加者はそれぞれの経験を語ることで、あらたな「気づき」とそれによる「経験の向上」につなげます。

●開催方法(参考)

公共のカフェなどを利用して、10~15分程度の専門家などからの話題提供ののち、参加者が対等な立場でテーマにそってみずからの経験を語ります。全体で60~90分程度。6~8名ほどの参加者により開催。参加者についてはSNSやビラなどで募集。なお、FacebookとTwitterはともに「環境カフェ(水と緑の市民カフェ)」で設定しています。「水」と「緑」はそれぞれ生命と自然を象徴しています。

※表1. 「環境カフェ」開催の主体と場所

タイプ	主体	場所
1	専門家(研究者)	公共のカフェ、学内など
2	大学、研究所、学会、NPO	一般公開、大会、地域
3	学生(サークル)	学内(学園祭など)、地域

※表2. 「環境カフェ」開催実績(2016年5月1日現在)

A. 場所
タイプ1(21回):東京、つくば、札幌、大阪、京都など タイプ2(3回):つくば(国立環境研究所)、仙台(日本生態学会)など タイプ3(6月以降に予定):横浜国大、東京大、京大
B. テーマ
レイチェル・カーソンと『センス・オブ・ワンダー』/「水と生命」を考える/『海辺』の生態学、「環境と生命」の倫理、環境芸術について/カーソンプロジェクト(NHKカルチャーラジオ「レイチェル・カーソンに学ぶ」)/社会コミュニケーションと芸術/「センス・オブ・ワンダー」の感性に生きる
C. 開催例:「水と生命」を考える
①「ああ、水!」、②地球の水、③「水と生命」について、それぞれ、サン＝テグジュペリ『人間の土地』(1939年)やレイチェル・カーソン『沈黙の春』(1962年)、ベトナムの禅僧ティク・ナット・ハンの人文的言説と「人体の水分欠乏率と症状」「地球上の水の量」「地球の水の動態」などの科学的データから、生命(人)と自然(水)のつながりについて参加者の理解と共感をえました。

【ASLE-J Grad Journal (院生組織だより)】

シンバがマスクをかぶるとき —「ダブル・イヴェント」と能面—

武田 寿恵 (明治大学・院)

1997年にブロードウェイで幕を開け、翌年には劇団四季による日本での輸入上演が始まったミュージカル『ライオンキング』。本作最大の特徴は、演出家のジュリー・テイモアが提唱する「ダブル・イヴェント」という演出方法だろう。テイモアが「舞台が創られる方法を隠すよりも、いかに創られるかを見せるところに、マジックは生まれる」(28)と語るように、「ダブル・イヴェント」では、動物をかたどったマスクやパペットと、それを操る役者の双方が同時に姿を見せる。例えば、ミーアキャットやサイチョウのパペットはそれを操る役者とともに舞台上に登場し、ライオンのマスクは役者の顔を隠すことなく頭上に置かれる。すなわち、観客にはパペットやマスクを操る役者が、隠されることなく提示されるのだ。

この演出方法は、主人公が少年のヤングシンバから青年のシンバへと入れ替わるシーンで、最もその効果を発揮している。このシンバの成長は物語が大きな転換を迎える場面であり、ミュージカルの原作となったディズニーの同名アニメーションでは、このシンバの成長過程はコマ送りのように段階を追って描かれていた。これに対し、舞台ではシンバの成長は、子役から青年の役者への入れ替わりと、「ダブル・イヴェント」によるマスクの装着で表現されている。第一幕も終わりにさしかかった頃、子役演じるヤングシンバが舞台袖の暗闇に消えていったかと思うと、およそ10秒の後に再びステージに姿を現わす。ドレッド頭だった子役と入れ替わって登場した青年のシンバの頭上には、立て髪を生えそろうたライオンの大きなマスクが乗っている。観客はこのとき、シンバの頭の上に現れたマスクの存在から、たった10秒の不在が表現するものが、「変身」の瞬間ではなく、まぎれもないシンバの「成長」の時間であったのだと理解する。それを可能としているのが、役者が素顔をさらした状態でマスクをかぶることで、常にマスクと役者の二重性を維持し続ける、テイモアの演出方法「ダブル・イヴェント」であった。

もちろん、マスクをつけるということが「成長」という時間を瞬間的に表現するということは、『ライオンキング』にのみ見られることではない。例えば、能の世界では面を使用できるようになること自体が能楽師の成長を意味している。能において、子方と呼ばれる子役たちは、直面すなわち素顔で能舞台に上がる。この子方が成長し、初めて面をつけて舞台に立つことを「面掛」と呼ぶのだが、『ライオンキング』におい

ても、子役が演じるヤングシンバは、「ダブル・イヴェント」の演出から除外されたかのように、素顔のまま舞台上に立たされている。さらに、能では面掛の後であっても、能楽師はその技量に合わせた面しかつけることは許されない。能楽師はその成長の進歩に合わせてつける面の種類などを変えていくのだ。金剛流の能楽師、金剛巖は、能楽師と能面の関係性について、「たれそれはこのごろ大分藝があがつてきたから、同じ小面のうちでも少しましな作者のをかけさせようといふ風に、能面は能楽師に與へられる卒業證書のやうなもの」(37)だと述べている。例えば、神鬼畜の面は「體にかつぶくができてくれば二十歳代で許され」(46)、老女物と呼ばれるジャンルの演能に使われる面は、「古式にいへば六十以後でない」と許されない(46)のだという。

このような面の種類によって表現される成長の差もまた、『ライオンキング』におけるマスク、そして「ダブル・イヴェント」の役割を考える糸口となる。というのも、素顔だったヤングシンバは、マスクをかぶることで青年のシンバになるのだが、彼にはまだ父親や叔父がかぶっている電動式のマスクをつけることは許されてはいない。手元のスイッチで自在に動かすことのできるこのマスクは、青年のシンバの頭上に乗せられたマスクより複雑なものだ。だがこの電動式のマスクも、テイモアが著書で述べているように、シンバがさらなる成長を遂げたその時には、父のような電動式マスクの装着が可能となるのだろう。

能で着用される面には、それをつける能面師の技量や成長が大きく関係している。使用する面が変わっていくことが、実は能楽師の成長をも示すという二重構造は、ミュージカル『ライオンキング』におけるシンバの成長表現にも通じている。シンバがマスクをかぶる、あるいは変えることは、大きさや複雑さというマスク自体の成長と、マスクを操っている役者自身の成長を二重に描き出す。マスクと役者の二重性を維持し続ける「ダブル・イヴェント」は、たった10秒に託されたシンバの成長シーンでこそ、その真価を発揮するのだ。

●引用文献

金剛巖『能と能面』創元社、1951年。
ジュリー・テイモア『ライオンキング—ブロードウェイへの道』藤田みどり訳、日之出出版、1998年。

【学会報告】

ACLA報告 “Ecocriticism in Japan: Season 2” セミナー

和氣 久明 (Amherst College)

さる3月18、19日、米比較文学会 (ACLA) 大会 (ハーバード大) のセミナー “Ecocriticism in Japan: Season 2” では、日本を対象にして環境批評することの意味を、昨年のシアトルに引き続いて追求した。今回も参加したのは、共同オルガナイザーである管啓次郎氏 (明治大)、結城正美氏 (金沢大)、私の三名とアレックス・ベイツ氏 (Dickinson College)。これに新たに九人が加わった。ASLE-J会員は、上記三名のほか、上野俊哉氏 (和光大)、クリスティーン・マラン氏 (ミネソタ大)、塚田幸光氏 (関西学院大)、翻訳者の森田系太郎氏。

初日には、マージョリー・ライン氏 (ウイスコンシン大-Whitewater) が『源氏物語』における自然の描写を再検討、上野氏が安部公房のエコロジー観を論じ、ベイツ氏が村上春樹「かえるくん、東京を救う」、私が中上健次『火まつり』、孫崎玲氏 (チャップマン大) が川上弘美「神様2011」を取り上げた。

翌日の第二セッションでは、結城氏がアメリカのネ

イチャーライティングが日本の環境文学に与えたインパクトを指摘、マラン氏が自然の言語化に生じる問題を考察、マルゲリータ・ロング氏 (UC-Irvine) が大江健三郎作品の音楽 (と無音) を論じ、塚田氏が最近のマンガに見られる人間崩壊 (ゾンビ) イメージの奔流を紹介。

続く第三セッションでは、フクシマ以後をテーマに、ダグラス・スレイメーカー氏 (ケンタッキー大) がみずから英訳した古川日出男『馬たちよ』を朗読、森田氏が玄侑宗久の『光の山』を精読し、管氏が木村友祐『聖地Cs』と眞並京介『牛と土』を淡々と論じた。最後にリヴィア・モネ氏 (モンテリオール大) が、アニメ『Coppelion』の核汚染された世界を語った。

全体に質疑応答の時間が確保され、互いの認識が深まる非常にスリリングな機会となった。今年の後半には論集を完成、2018年3月のACLAロサンゼルス大会でセミナー “Season 3” 開催をもくろむ。

イベント・文献情報 (～2016年10月)

【イベント】

- [2016年7月31日] ハイデガー研究会×脱構築研究会共催シンポジウム「動物をめぐる形而上学的思考の行方—ハイデガーとデリダ」(立正大学品川キャンパス)
- [8月5日] スコット・スロヴィック講演会 “The Fourth Wave of Ecocriticism: Materiality, Sustainability, and Applicability” / 公開セミナー (川津雅江「マテリアル・フェミニズムからマテリアル・エコクリティシズムへ」金津和美「環境詩学と実践—エコクリティシズムの第4波に向けた問い」) (専修大学神田キャンパス)
- [8月6日] SES-J / MESA合同大会 (シンポジウム「クロス・エスニックの文学とエコクリティシズム」、特別講演 [スコット・スロヴィック] ほか) (大東文化会館)
- [11月5～6日] 第5回ISLE-EA (International Symposium on Literature and Environment in East Asia) シンポジウム “Environmental Humanities: Globalization, Adaptation, Education” (東國大学 [韓国])

【文献】

- [2015年11月] 小口一郎 (編) 『ロマン主義エコロジーの詩学—環境感受性の芽生えと展開』(音羽書房鶴見書店)
 - Bruce Allen and Yuki Masami (eds) *Ishimure Michiko's Writing in Ecocritical Perspective: Between Sea and Sky* (Lexington)
- [12月] Jeffrey Jerome Cohen, et al. (eds), *Elemental Ecocriticism: Thinking with Earth, Air, Water, and Fire* (U of Minnesota P)

- [2016年1月] エドゥアルド・コーン『森は考える—人間間的なるものを超えた人類学』(亜紀書房)
- [2月] 佐藤嘉幸/田口卓臣『脱原発の哲学』(人文書院)
 - Joni Adamson, et al. (eds), *Keywords for Environmental Studies* (New York UP)
- [4月] 野田研一『失われるのは、ほくらのほうだ—自然・沈黙・他者』(水声社)
 - Timothy Morton, *Dark Ecology: For a Logic of Future Coexistence* (Columbia UP)
- [5月] Molly Wallace, *Risk Criticism: Precautionary Reading in an Age of Environmental Uncertainty* (U of Michigan P)
 - Hubert Zapf (ed), *Handbook of Ecocriticism and Cultural Ecology* (Mouton De Gruyter)
- [6月] 岩佐茂/佐々木隆治 (編著) 『マルクスとエコロジー—資本主義批判としての物質代謝論』(堀之内出版)
 - 河野哲也『いつかはみんな野生にもどる—環境の現象学』(水声社)
 - ステーブン・シャヴィロ『モノたちの宇宙—思弁的実在論とは何か』(河出書房新社)
- [7月] 野田研一/山本洋平/森田系太郎 (編著) 『〈他者〉とつながる、ということ—環境人文学の可能性』(勉誠出版)
- [8月] Ursula K. Heise, *Imagining Extinction: The Cultural Meanings of Endangered Species* (U of Chicago P)
- [10月] Stacy Alaimo, *Exposed: Environmental Politics and Pleasures in Posthuman Times* (U of Minnesota P)

【シリーズエッセイ シネマ×環境 (6) 最終回】

『南の島の大統領 沈みゆくモルディブ』 (*The Island President*, 2011)

塚田 幸光 (関西学院大学)

レディオヘッドのサウンドがアドレナリンを刺激する。息を飲むほどに美しい島々。珊瑚礁に囲まれた宝石のような首都マレ。音が映像を煽り、カメラは観客を誘い降下する。きらめく海、輝く砂浜、最高級ホテルリゾート。インド洋に浮かぶモルディブとは、地上の楽園であり、究極の癒しの場だろう。だが、そのユートピア・イメージは、モルディブの表層に過ぎない。

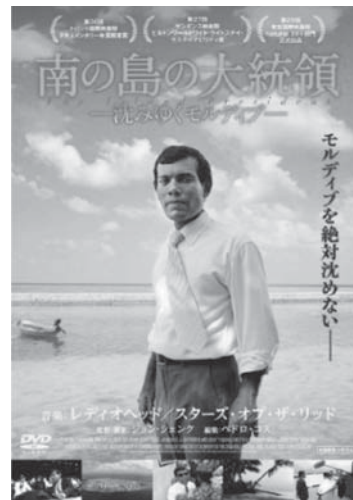
『南の島の大統領』(2011)は、長期独裁政権を打倒し、イスラムの小国に民主化を打ち立てた若き大統領モハメド・ナシードのドキュメンタリーである。彼が尽力した仕事は二つ。民主主義の実現と地球温暖化対策である。とりわけ、水中閣議のパフォーマンスに顕著なように、彼はモルディブを水没から救うための努力を惜しまない。メディアを駆使し、AOSIS(小島嶼国連合)をまとめ、インドや中国と交渉し、二酸化炭素排出規制の枠組み合意を目指す。COP15(気候変動枠組条約締約国会議)での規制合意に雪崩れ込むラストシーンは感動的ですからある。大国が彼の情熱に感染し、奇跡を起こすからだ。刹那、観客は錯覚するだろう。これはフィクションなのか、と。

モルディブ共和国は、人口40万にも満たない小国である。そして、ポルトガル、オランダ、イギリスの保護国であり、植民地的歴史と無縁ではない。だが、共和制に移行後も「支配」の影からは自由ではない。マウムーン・ガユーム元大統領による30年にも及ぶ独裁が好例だろう。国民の99%が支持したとされるガユームは、観光資本を導入する一方で私腹を肥やし、政治犯を排除する。きらめく砂浜は、拷問の場であり、海辺の小屋は政治犯の檻。リゾートからは見えないモルディブ。そこは楽園であり、監獄でもある。ユートピアがディストピアに反転する独裁国家では、人々は沈黙するしかない。

だが、独裁は突然瓦解する。2003年、拷問遺体公開で民主化運動に火がつき、2004年、津波でGDPの半分が奪われ、状況は一変するからだ。欧州からの援助の条件とは政治改革。ナシードは、この波を利用して、選挙を実現し、大統領に登りつめる。だが、そこで彼が見たのは、温暖化による甚大な被害予想図。海拔1メートル未満の土地が国土の8割を占めるモルディブでは、1メートルの海面上昇で、その8割が失われるのだ。ではどうすれば、国土の水没を防げるのか。モルディブ一国では当然解決できない。結果、彼は世界に対峙せざるを得なくなる。

『南の島の大統領』の特徴は、大統領のドキュメン

タリーでありながら、その「距離」が異常に近いことだ。インド首脳との会談や、交渉の戦略会議など、通常であればカメラはそこに入れない。会談や会議後のオフレコ・トークに限らず、車中、ホテルの部屋や食事の雑談まで、あらゆる角度からナシードを捉える(NYのスポーツバーのエピソードは興味深い。客と一緒にNFLを見て、店の隅でハンバーガーをほおぼるのだ)。カメラは公私のナシードに寄り添い、複雑に変化するその表情を映し、言葉を拾う。それは大統領という「象徴」を捉えるのではない。モハメド・ナシードという「個人」の葛藤や不安、闘志や希望を掬い取るのだ。



ドキュメンタリーの文法に則して言えば、ナシードと観客の同一化は御法度だろう。バイアスがかかり、客観性が担保されないからだ。しかしながら、『南の島の大統領』は、限りなくそのバイアスを利用しているように見える。We want to survive.というナシードの言葉に集約されるように、この映画は、温暖化防止をドライブする政治的プロパガンダとしての役割をためらわない。ナシードの「正義」に疑問を投げかけず、温室効果ガス規制という「目的」に向かって邁進するのだ。この一種の開き直りこそ、この映画の勢いであり、脆さだろう。

2012年、ナシードはクーデターで失脚し、モルディブは再度、民主化から後退する。だが、観光産業にとっては、民主化闘争よりも、安定的「独裁」の方がいいらしい(だからこそナシード失脚の要素がある)。楽園と独裁。このキーワードは、ナシードの鬼門だろう。ならば、我々は環境と政治の関係について、如何に考えるべきだろうか。

事務局より

■2016年度ASLE-Japan／文学・環境学会 第一回役員会・例会のご報告

平成28年6月4日（土）明治大学中野キャンパス高層棟208教室（〒164-8525 東京都中野区中野4-21-1）において第1回役員会が開かれました。まず、2015年度会計報告および監査報告、2016年度予算案の審議がなされ、承認されました。また、一部役員改選案、全国大会案、院生組織のウェブサイト開設、終身会員についても審議を経て了承されました。続いて、ニューズレターの発行、現会員数（192名）、院生組織の活動についての報告がありました。役員会後、管啓次郎代表の司会のもと、例会として姜信子さんによる講演会とワークショップ「読む書く歌う旅をする私～私はここにいる」が開催されました。ご講演の中で渡辺八太夫師匠による三味線演奏も行われました。参加人数は非会員も含め27名となり盛会でした。

■2016年度ASLE-Japan／文学・環境学会 全国大会開催のお知らせ

と き：2016年8月20日（土）～21日（日）
と ころ：AOSSA福井市地域交流プラザ 6F
（〒910-0858 福井市手寄1-4-1 TEL：0776-20-6101）

大会実行委員：浜本隆三（福井県立大学）
*プログラム、スケジュールの詳細につきましては、浜本実行委員長からメーリングリストを通じて送付されております。併せてご確認ください。たくさんの方々のご参加を心よりお待ちしております。

■2016年東アジア環境文学国際シンポジウム (The Fifth International Symposium on Literature and Environment in East Asia (ISLE-EA) “Environmental Humanities: Globalization, Adaptation, Education”) 開催のお知らせ

と き：11月5日（土）～6日（日）
と ころ：東國大学 (Dongguk University, Seoul, Korea)

<会費納入のお願い>

2016年度の年会費（一般5,000円、学生2,000円）の納入をお願いいたします。

ゆうちょ銀行
口座番号 01300-0-93821
加入者名 文学環境学会
(フリガナ：ブンガクカンキョウガクカイ)

<終身会員制度をご活用ください>

「終身会員制度」につきましては、本学会ウェブサイトの入会案内にも掲載しています。現在、5名の先生方が終身会員となっております。是非とも終身会員制度をご活用いただき、本学会に末永くご指導賜りますようお願い申し上げます。

<会員情報の訂正・更新について>

会員の皆様をお願いして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、すみやかに事務局補佐・辻 (twain1910★gmail.com) までご連絡ください。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

..... 広報より

広報では、会員の皆様からお寄せいただいたご活躍の情報を学会のウェブサイトに掲載しております。アドレスは以下のとおりです。

<http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/>

今後も定期的に情報の更新をしてゆきますので、皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の松永京子 (kyokomatsunaga★mac.com) までお送り下さい。次回の更新は2016年11月ごろを予定いたしておりますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまでに情報をお寄せ下さっている先生方は、どうぞ新しい情報のみをお送り下さい。できるだけ多くの方々からのご連絡をお待ちしております。どうぞよろしくお願いたします。

ASLE-J 広報委員 喜納育江 河野千絵 松永京子

..... 編集後記

ニューズレター第40号が完成しました。編集では細々とした苦労もありましたが、こうして形ができると嬉しくなります。管代表の巻頭言は前号のオランダの風景をめぐるエッセイにつながる内容になっていますので、ぜひご一読ください。また暑い夏が近づく中、熱意あふれる今年度の全国大会開催のお知らせを掲載しています。福井での大会はきっとすばらしいものになることでしょう。乞うご期待！

塚田先生には「シネマ×環境」の連載を長らくご担当いただき、本当にありがとうございました。変化に富んだエッセイは毎回楽しみでした。今号には「イベント・文献情報」も掲載しました。イベントはこれから年内に開催されるものを四つ、文献情報は昨年末に出版されたものから今秋に出版されるものまで精選しています。イベント・文献情報は継続的に掲載することを考えており、情報収集には会員の皆さまのご協力が欠かせません。ぜひよろしくお願いたします。(C・A)

ニューズレター編集委員会では、会員の皆さまからのご寄稿(エッセイ、批評、書評など)、イベント・文献情報を随時募集しています。詳細については各編集委員にお問い合わせ下さい。



【発行】

代表 管啓次郎
事務局 長岡技術科学大学 高橋綾子
〒940-2188
新潟県長岡市上富岡町1603-1
Tel/Fax: 0258-47-9805 (直通)
E-mail: tayako★vos.nagaokaut.ac.jp

【編集】

編集代表 千里金蘭大学 浅井千晶
〒565-0873
大阪府吹田市藤白台5-25-1
Tel:06-6872-7945 (直通)
Email: c-asai★cs.kinran.ac.jp